

終了報告書

留学プログラム名	イオンワンパーセントクラブ アジアユースリーダーズ 2014
所属（本学）	工学部 国際開発工学学科 2年
留学先国	ベトナム
留学期間	プログラム実施期間：2014年8月17日～2014年8月23日 滞在期間：2014年8月17日～2014年8月23日

報告書内容

留学前の準備

ベトナムに一週間の滞在だったので、VISAの取得の必要はなかった。航空券、滞在先のホテルの予約などはすべてイオン側がやってくれたのでこちらとしてやることは特になかった。語学は日ごろから部活（ESS）での練習や自主的に英会話を習ったりしていた。

留学費用

お土産代のみ、約1～1.5万円、保険料は5000円ほど、他滞在費、航空券、食費などはイオンがもってくれました。

留学先での語学状況

ベトナムでは現地の大学生、インドネシアの大学生に対しては英語を使用。一般的なベトナム人は基本的に英語を話せないらしい。自分はTOEIC765点ですが、英語に関して不自由はあまりなかったです。

Asia youth leaders funded by AEON 1% club 7/17-7/23



What I leant from this?

Activities

Picking tea leaves/ Rice planting/ Catching fish

ハノイ市から約二時間ほどバスで走り、ベトナムの農業を体験するために田園地帯にやってきました。インターネットでは途上国を調べれば基本的に都市部の情報が出てくるので、それがその国の姿に見えがちでしたが、実際の途上国の主役はこう言った都市以外に住む人たちです。実際に見て感じることでしかわからないことなので、こうしてその機会をもらえたことをうれしく思います。1時間ほどドライブしたときに通過した街の店でトイレ休憩がとられました。そのトイレは天井から大きなクモがぶら下がり、便器はなく、床に穴がただけで備え付きのシャワーで流すものでした。おそらくこれが郊外の町でのスタンダードなのだと感じました。お茶摘みは初めての体験で、一番上の葉三枚しかとってはいけないということもこの時初めて知りました。大きな重機を使って大量に収穫するということができないため、安い労働力を得られる途上国でお茶栽培が栄えているのかと考えます。その時に Ghivo というインドネシア人がいったことが衝撃的でした。一番上の葉はヨーロッパに、二枚目が日本に輸出され、三枚目が現地の方に行く。皮肉の一種かもしれませんが、今現在先進国が途上国を食い物のようにしていることが伝わりました。稲を植える作業は想像していたよりも重労働でした。日本の農業を経験していないのが残念です。両者の比較などを行うことができれば、さらにベトナムの農業に関する理解を深められたと思います。この一日を通して感じたことは、自然と寄り添って生きることの大変さと自分たちの豊かな生活を



支える途上国の現実でした。月 3 万ほどの給料を得るためにこれほどの重労働をし、得られた収穫物は先進国に送られ、さらに先進国のごみ問題のことも考えると半分が破棄されているのかもしれませんが。それを肌で感じた今、どのように行動すればいいのか。これから時間をかけて考えるべきテーマではあると思いますが、今は一つ一つの産物に感謝の気持ちを持つことから始めます。

Measurement on air pollution of PM2.5 in Hanoi

4 日目に市内を回り、主にラッシュアワーの交通量の比較的多い交差点において微小粒子の測定を行いました。ハノイは人口 600 万に対してオートバイ 450 万と数字に出るほどバイクが主要の交通手段となっています。他の交通手段が乏しいためか基本的にどこに行くにもバイクを使うようです。加えて交通ルールは日本のそれとはとてもかけ離れたもので、信号はなく、原チャリの二人乗りはあたりまえで、自転車も走る。交差点においては 4 方



向から同時にさまざまな車両が進入しては抜けていき、アイコンタクトで相手をよけ、自分の運転技術のみを信じているといった様子でした。当然そのような状況下でスピードが出せるわけもなく、すべて自転車と同じスピードで走っていました。やはりこういったところに大気汚染問題の根っこが隠れているのでしょうか。しかし、交通ルールの整備など解決法を提示することは簡単でも、すでにしみついてしまった彼らの生活様式を変えることはとても難しく思います。実際の測定の話をする、平均は $120-150 \mu\text{g}/\text{m}^3$ でした。日本の環境基準値が 35 で警報を出す危険ラインが 75 であることを踏まえると、かなり健康を脅かすレベルまで高まっているのだと思います。

す。ちなみにベトナムの基準が 65 なのでそれさえも上回っており、政府としても対策を考える段階にきていることは理解しているそうです。実際に立ってみると、微妙な息苦しさや異臭が感じられました。オートバイクに乗る人たちの多くはマスクを着けていましたが、聞くところによると彼らも同じように感じ、自分たちの肺を守るためにつけているようです。余談ですが、女性の多くはUVから肌を守るためにマスクをつけているらしく、自分の健康にたいする目の付け所が日本人とは少し違うことを感じました。移動の際に公共のバスを使ったのでそのことも少し書きます。ハノイ市内の公共の移動手段はバスしかなく、鉄道は市間をつなげるものしかありません。またバスは一社による独占状態となっています。前日に foreign trade university にいき学生に尋ねたところ、バスはとても不便なのでバイクを使うといっていました。確かにバスはとても快適とは言えない乗り心地でした。簡単に感じた問題点を挙げます。

1. バスの横幅の狭さ、座席数などの問題
2. 床に座るなどの乗客のマナー
3. 揺れの激しさ（おそらく運転手の質、車両の質、渋滞、バイクの遮りなどに起因する）
4. 運賃回収システム、乗務員が込み合うバス内をうごきまわり 7000DON を集めるのは明らかに不効率。IC カードの導入を検討してほしい。
5. 到着時間の不確実性

日本のバスを基準に考えるのはあまりに非現実的だとは思いますができるところから問題点を解決していかないとバスユーザーは増やせないと思いました。

Team Discussion

内容長くなるのでここには書かず、主に感じたことを書きます。

朝 8 時から始まり、昼夜にそれぞれ休憩を 1 時間ほどはさみ、11 時までディスカッションとプレゼン作成を行いました。インドネシア、ベトナム、日本から 2 人ずつの 6 人チームです。インドネシアの二人はととてもできる人でした。Anbar はチームリーダーを務めていたため主にまとめ役に徹し、みんなの意見を吸い上げ、議論を活性化し、次に何をやるかななどを明確化するのに長けていました。英語のスキルにも優れていたため、提言書のレポート作成をすらすらとこなし、プレゼン作成の際には細かいワードを直してもらいました。決して熱くはならず、みんなのきもちをくみ取り、抑えるなど精神面においてもとてもいいリーダーで、こうしてかきあげてみるととても学べる場所が多かったことがわかります。



Ghivo は提言者であり、さらにその内容を詰めることにとても秀でていて、同時にムードメーカーでした。2 つの提案のうちの一つを担当していたので、後半はそちらに終始してしまって、あまり話せなかったことが残念です。しかし前半の議論では様々な意見提供してくれていました。途上国独特のハンガリーさをもっていて、才能もあり常に学びたいという強い意欲をひしひしと感じました。同時にひくところではひき、他人の意見を柔軟に受け入れる力を持っていて、どれだけ提案が難航しても笑顔で作業しているようなやつでした。チーム作業においては彼のような人が一人いるだけで班の雰囲気はガラッと変わります。わかっているにもかかわらずとても難しいため、その能力に関してはただただ尊敬して

いました。今回同じチームになったベトナム人は性格としてはとてもいい方たちで、温かな雰囲気でしたが、ディスカッションにおいてあまり参加してもらえなかったことは少し残念です。一人はときたま参加してはいたものの主に批判で、新しい代替案を出さなかったためしばしば議論を止めてしまうことが多かったように感じます。自分もそれから学び、批判と代替案はセットであるべきことを再確認しました。1つ心残りはそのことを彼にちゃんと伝わらなかったことです。言うことによって班が嫌なムードになるのが嫌でみんな口にできなかったのだと思いますが、今ではそれは間違っていたと思います。もし彼は最後までそのことに気づいてなかったとしたらちゃんと伝えてあげるのが正しい行動だったと終わってから思い後悔しています。もう一人は議論にほとんど参加せず、プレゼンにはとても出たがっていたことがとても衝撃的な人物でした。あちらではこういった活動で壇上に登り話すことがのちの就職などで大きな要素になるそうですのでそのためだと思います。人によってはこれを日本人にはない積極性というのかもしれませんが、積極性とは能力、活動への貢献とセットであるべきもので、でなければ相手を不快にしてしまう、そういうことを感じました。もちろんこれはひとそれぞれの性格の問題で、国民性だとかそういうふうに落とし込んではいけません。現に激しい発言を多くするインドネシア人や、徹夜で作業したベトナム人もいました。大事なことは彼らが日本人とは全く違った個性を持っているということです。それらのいい面も悪い面もよく観察し、分析し、吸収し自分のこれからに生かしていくことこそが大切なことで、多様性を受け入れるということなのだと思います。日本とは違うのだなというだけではなく、どのように違うのか、その個性がどのような状況で利益や不利益を生むのか、その先に踏み込んでいくことに力を使おうと思います。

全体を通して感じたこと

- **東南アジア人が日本の文化、言語に対して高い興味をもってくれていること。**

去年イギリスに行った時も感じたことですが、日本という国は途上国からみたら本当に憧れられている国なのかもしれません。人によっては日本に留学していたことのある人もいたり、日本語を多少学んでいたり、最近のPOP文化に興味があったり様々です。自分たちが今まで当たり前のように享受してきた多くのものが途上国にはないということを感じました。日本は世界に誇れる自動車、電子機器などの固有産業を多く持っていますが、途上国にはそれがなく、世界に誇れる文化という点においても日本は大陸から離れたその独自性と長い歴史という面においてとても興味を持たれていると感じます。外に出る前にまずは中を知らなくてはならないことを実感しました。日本がどう世界から見られているのか、どのような文化が特殊なのか、どれだけの産業が世界で知られているのか、まだまだ知らないことは多いです。同時に感じインドネシアの文化、言語にももっと積極的に知っていく努力をしなければなりません。

- 東南アジアの人々の親日さ

ベトナムに行く前に事前準備として歴史について調べました。日本はベトナムを一時植民地として支配していて、その際に住民に対し厳しい行いをしていたことを本で読んでいたため、中国同様に反日的な感情もあるものかと思っていましたが、自分がであった人、高校生、大学生、農家の方、ホテルの従業員、ハノイの市民、市場の店員にいたるまでみんな笑顔で接してくれました。むしろ日本は発展への多大な支援をしてくれているとっていただき日本人としてとてもうれしかったです。インドネシア人も同様でした。最近では暗いニュースのほうが多いですが、中国と韓国に未だ遺恨はあるものの、日本が戦後行ってきたことにはいいことも多くあったのだと思います。現地の人が実際に日本のことをどう思っているかということは実際に現地に行き感じて話してくることでしかわかりません。ネットの情報なんていうものはあてにすべきではないと思っています。もしかしたらいまだに日本のことを好かないベトナム人もいるかもしれませんが、もっといろいろなベトナム人に触れ、自分のなかの経験や考えを深めていきたいと思っています。

